

平成 24 年度第 7 回（通算第 51 回）

山口国際文化化学研究会へのおさそい

## 変化と挑戦の時代における教育

多文化化する日本は誰にどのような教育を提供すべきなのか  
- 多文化教育・国際理解教育・異文化交流論の狭間で -

報告者：岩野雅子 大学院国際文化化学研究科 教授

日時 平成 24 年 11 月 28 日（水曜日）16 時 10 分より

場所 国際文化学部棟 C-12 教室

主催 大学院国際文化化学研究科

### 報告要旨

世界において「国際化」という言葉が使い始められて約 200 年、「グローバル化」という用語が登場して 25 年になる。

一方、日本において多文化教育の登場は 1980 年。それに先立って世界（ユネスコ）の国際教育とは別に日本特有の国際理解教育の推進がなされ始めたのは 1970 年代半ばであった。異文化間教育学会の設立は 1981 年であり、ここでは「海外・帰国子女教育、外国語教育、外国人への日本語教育、在日外国人子弟教育、教育・研究の国際交流(教師、学者、学生の派遣や留学)、海外移住者の教育、国際理解教育、異文化間教育担当者の教育訓練の制度・方法、諸外国における多文化・多言語教育、異文化適応、異文化間教授＝学習過程、二言語教育（バイリンガル教育）、アイデンティティ、異文化間コミュニケーション等、諸問題に関する論理的・実践的な研究」（学会ホームページより）といった多様なテーマが取り扱われてきている。

このような、ここわずか 30 年間の動きとして登場した学術領域にあって、自らの研究領域と教育領域を定めていくことは、今まさに変動しつつある教育の流れをつかむことへの挑戦でもある。

報告では、異文化理解の「転機」、異文化理解の「リソース」（人、教材）、異文化理解で育てる人材像（国際人等）という 3 点について、報告者が担当する 3 つの科目を通した試みを事例に取り上げ、一般的に焦点化されているマイノリティ教育としての多文化教育ではなく、マジョリティ教育としての多文化教育について考える。

※終了後 18 時から Yucca で、第二部として自由なトークを展開できる場（山口国際文化学 SALON）を準備しております（有料）。こちらも皆様の積極的なご参加をお願いいたします。